

特性概要

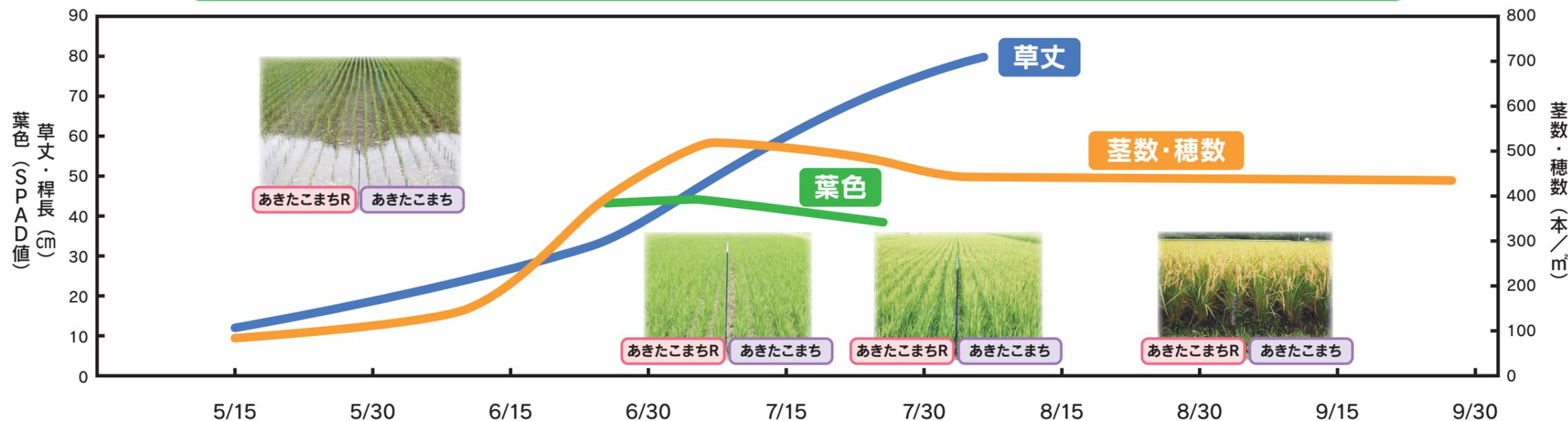
品種名	あきたこまちR	あきたこまち
早晩性	早	早
出穂期 成熟期	早	早
出穂期(月日)	7月27日	7月27日
成熟期(月日)	9月5日	9月6日
稈長(cm)	76.8	77.1
穂長(cm)	17.3	17.6
穂数(本/m ²)	439	433
倒伏(0:無~5:甚)	0.1	0.0
いもち耐病性		
葉いもち	中	中
穂いもち	やや弱	やや弱
耐倒伏性	やや弱	やや弱
耐冷性(障害型)	中	中
高温登熟性	中	中
穂発芽性	やや難	やや難
玄米収量(kg/a)	57.3	58.8
「あきたこまち」比(%)	98	(100)
玄米千粒重(g)	22.6	22.8
玄米外觀品質(1~9)	1.8	2.0
玄米粗たんぱく含有率(%)	6.6	6.5
白米アミロース含有率(%)	16.9	17.1

- 1) 秋田県農業試験場奨励品種決定基本調査標肥区令和元~3年の平均。
- 2) 施肥: 基肥 N-P₂O₅-K₂O 各5kg/10a、追肥(減数分裂期) N 2kg/10a
- 3) 特性は育成地(秋田県農業試験場)における評価。
- 4) 玄米収量、玄米千粒重は篩目1.9mm、水分15%換算した値。
- 5) 玄米外觀品質は(財)日本穀物検定協会東北支部調査 1(1等上)~9(3等下)
- 6) 玄米粗タンパク含有率は水分15%換算、ケルダール法で測定。
- 7) アミロース含有率は乾物換算、BLTEC社アミロースオートアナライザーで測定。

あきたこまちR 栽培暦

発行: 「あきたこまちR」生産・販売推進本部
(令和7年1月)
監修: 秋田県農業試験場

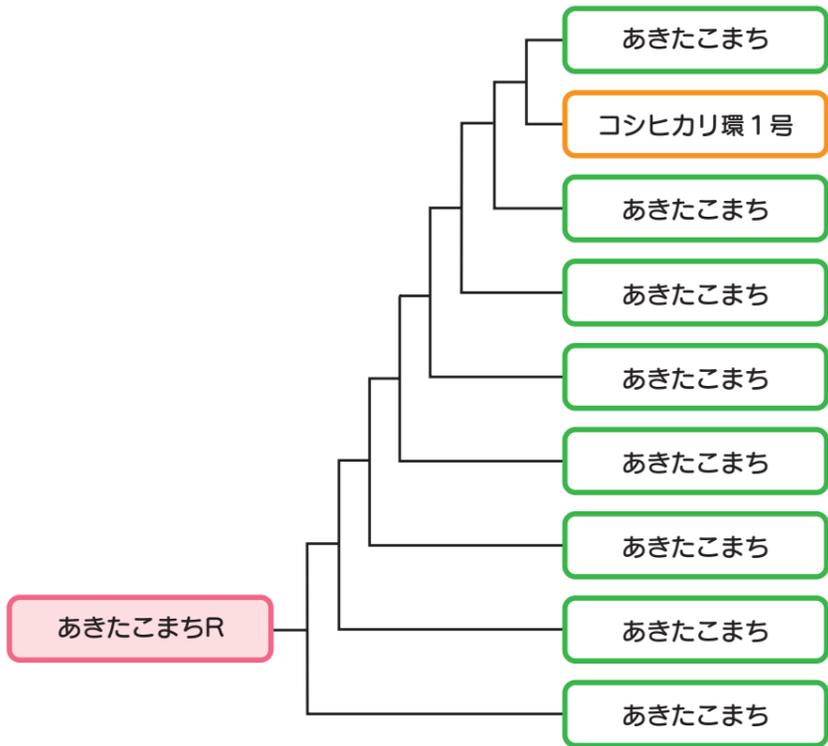
生育ステージと栽培管理



月	3月		4月		5月		6月		7月			8月			9月					
	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
生育ステージ				播種期	出芽期 緑化期 硬化期		田植え		分けつ 始 期	有効茎 決定期	最高 分けつ期	幼穂 形成期	減 数 分裂期 出穂期				成熟期			
水管理						深水	浅水	深水 又は 中干し	中干し	無効分けつ抑制 深水 又は 中干し	(低温時深水) 間断かん水	間断かん水(高温時かけ流し)	深水	落水(出穂30日以降)						
作業内容	種子準備 (種子消毒)		浸種	催芽 播種	育苗期防除 本田施肥 耕起	代かき	田植え 防除	除草剤 散布		中干し	溝切り	幼穂期 追肥	減分期 追肥	カメムシ等 防除		カメムシ等 防除 落水	収穫	乾燥 調製 等		
栽培管理	1. 種子予措 ①浸種を十分に行い、催芽はハト胸(催芽長0.5~1mm程度)に揃える。 ②低温により発芽が遅れるので浸種時の水温に注意する。 2. 土づくり ①土づくりは「あきたこまち」と同様に重視し、特に砂質で、かつ「秋落ち」が認められる水田では地力の底上げを図る。 ②ケイ酸質資材の施用は、玄米品質や病害虫に対する抵抗性の向上が期待できる。また、深耕や排水対策を実施することにより、高温下でも水稲は十分にケイ酸を吸収し、品質の低下を抑えることが期待できる。 ③砂質で、かつ「秋落ち」する水田では、マンガン質肥料の施用によりごま葉枯病を軽減できる。軽減効果はマンガン質肥料の施用量に応じて高くなり、その効果は少なくとも3年持続する。ケイ酸質肥料を施用している場合は、ケイ酸質肥料に替えてマンガン質肥料を施用する。					3. 施肥(あきたこまち並み) ①N:5~7kg/10a程度とするが、栽培地域、土壌条件により加減する。 ②P ₂ O ₅ 、K ₂ Oの各成分は8~10kg/10a程度とするが、栽培地域、土壌条件により加減する。 4. 田植え ①田植えは日平均気温で稚苗は13℃以上、中苗は14℃以上の日とする。最高気温15℃以下の日は田植えを行わない。 ②株の植え付け本数は、稚苗で4~5本、中苗で3~4本とする。 ③栽植密度は21~24株/m ² (70~80株/坪)とする。 ④植え付けの深さは稚苗は2cm、中苗は2.5cmとし、3cm以上の深植えにならないように注意する。 5. 水管理 ①田植え直後は水深4cm程度とし、湛水状態を保つ。 ②活着したら、分けつの発生を促進するため、浅水管理とする。					6. 有効茎決定期 ①6/25頃、目標茎数を確保したら、ただちに中干しを行う。排水不良田では、中干しと並行して溝切りを行う。 ②中干しの期間は7~10日程とし、田面に亀裂が1~2cm入り、足跡が付く程度とする。 ③中干し終了後は間断かん水とする。 7. 追肥 ①幼穂形成期に生育・栄養診断を行い、適宜、追肥の判断を行う。 8. 幼穂形成期 ①7/12頃、葉色の急激な低下に注意する。草丈は62cm以下を目標とする。 9. 減数分裂期 ①7/19頃、低温により、障害不稔・白ふが発生しやすいので、低温時には深水管理を行う。					10. 出穂期 ①7/27頃、出穂後10日間は水深5~6cmで湛水し、その後は出穂後30日頃まで2~3cmの浅水で、間断かん水とする。 ②落水の時期は概ね出穂30日後とする。早期の落水は登熟不良となる。 ③根の機能を維持するため、気温が30℃以上になる日はかけ流しかん水を行い、地温を下げる。 11. 成熟期 ①9/5頃、出穂後日数で45日前後である。刈り取り適期は日平均気温の積算値で950~1,050℃、籾の熟色では黄化程度90%の頃とする。 12. 病害虫防除 ①病害虫防除は、「あきたこまち」と同様に行う。 ②過去にごま葉枯病が発生した水田や砂質で、かつ「秋落ち」が認められる水田では、薬剤防除を確実に実施する。				

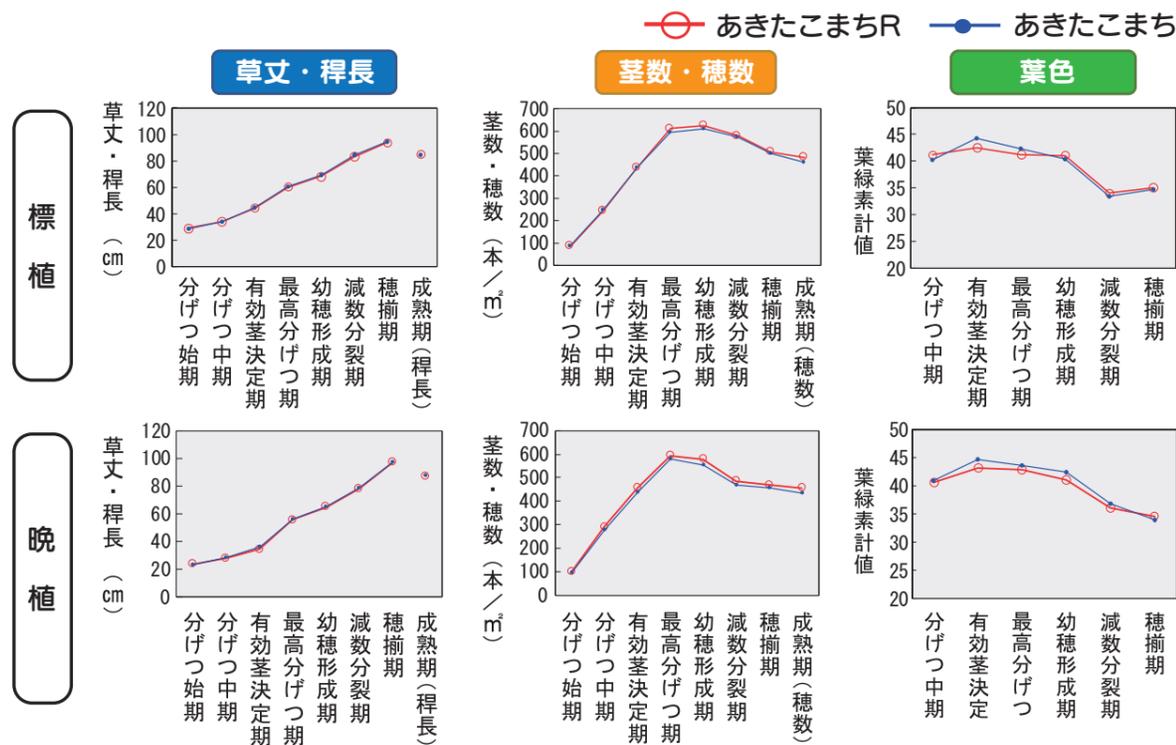
1. 系譜

○「あきたこまちR」はカドミウムをほとんど吸収しない品種。
 ○「あきたこまち」とカドミウム低吸収性品種「コシヒカリ環1号」を交配後、「あきたこまち」を7回戻し交配し、育成。



2. 生育特性

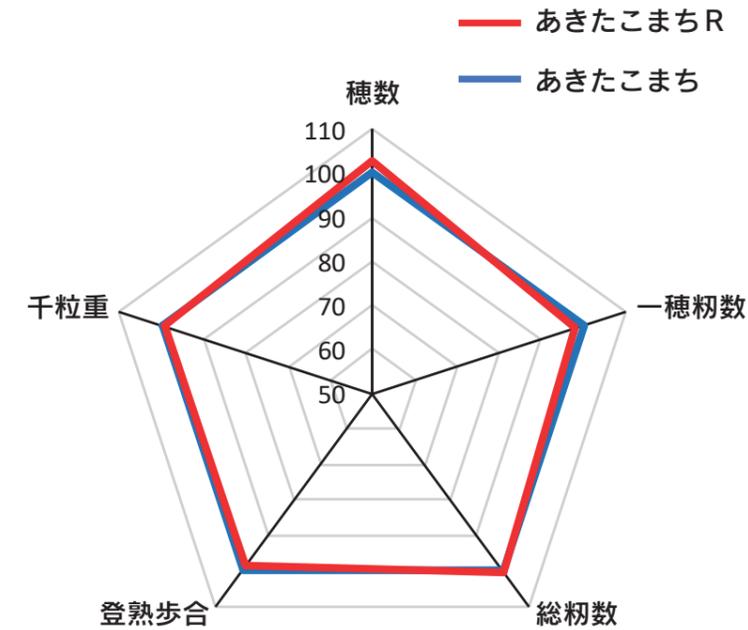
○「あきたこまちR」は「あきたこまち」と比較して、同等の生育経過を示す。



1) 標植：令和3年(5/17移植)、4年(5/16移植)および5年(5/16移植)の平均値。
 晩植：令和3年、4年および5年(5/25移植)の平均値。
 2) 基肥：7kg/10a (N、P₂O₅、K₂Oの3成分共通)。追肥：減数分裂期にN2kg/10a。
 3) 栽植様式：条間30cm、栽植密度 20.7株/m²、4本植え

3. 収量構成要素

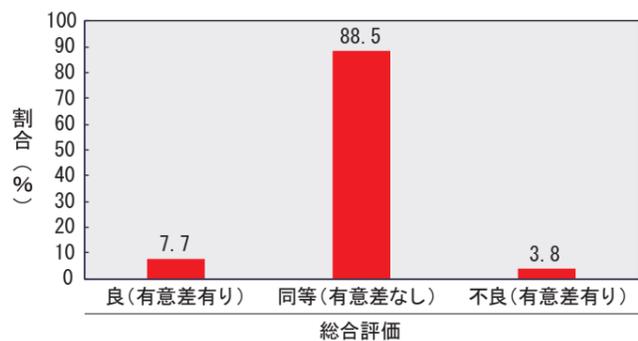
○「あきたこまちR」は「あきたこまち」と同等である。



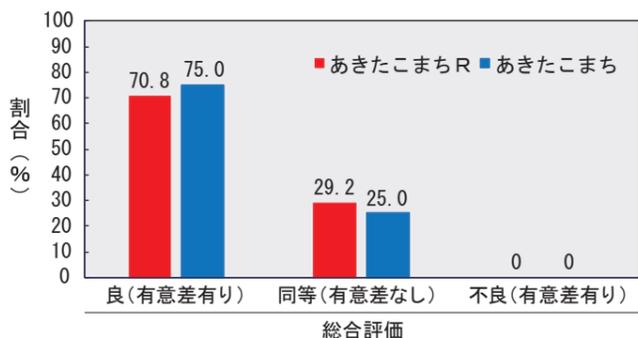
1) 秋田農試奨励品種決定基本調査ほ場(標肥区)の令和元～3年のデータを用いた。
 2) 「あきたこまち」の値を100としたときの相対値で示した。

4. 食味

○「あきたこまちR」は「あきたこまち」並の良食味である。



1) 「あきたこまち」を基準とした食味官能試験結果
 2) 令和元～4年産の同一産地「あきたこまち」を基準とした。
 3) 場内食味試験、n=26



1) 「コシヒカリ」を基準とした食味官能試験結果の比較
 2) 令和3、4年産の複数産地コシヒカリを基準とした。
 3) 外部委託試験、n=24

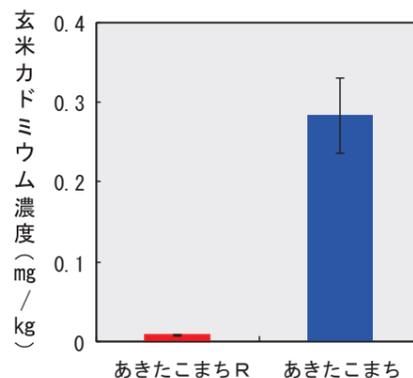
5. 玄米のカドミウム濃度と茎葉のマンガン濃度

○「あきたこまちR」は「あきたこまち」と比較して、玄米カドミウム濃度は顕著に低くなる。

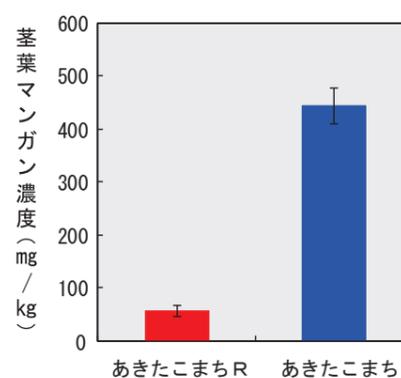
○マンガンの吸収能力が低く、ごま葉枯病が発生しやすい傾向がある。



ごま葉枯病の葉の病斑



1) 現地試験結果(平成29年～令和4年)の平均値。
 2) 棒グラフ上の線はバラツキを示す。
 3) 出穂期前後3週間の水管理は間断かん水とした。

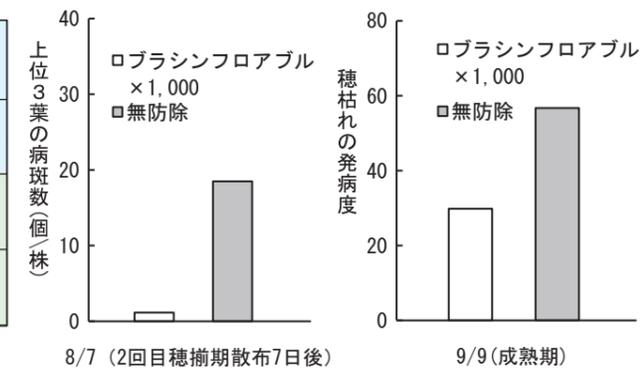


1) 現地試験結果(平成29年～令和4年)の平均値。
 2) 棒グラフ上の線はバラツキを示す。
 3) 出穂期前後3週間の水管理は間断かん水とした。

6. 栽培上の留意点

- 間断かん水で、穂ばらみ期以降の根の活力を維持する。
- 砂質で、かつ「秋落ち」が認められる水田では、ごま葉枯病が発生しやすくなるため、マンガン質肥料を施用するとともに、薬剤防除する。
- 過去にごま葉枯病の発生がある水田①、又は砂質で、かつ「秋落ち」が認められる水田②では、穂枯れ(ごま葉枯病菌)に登録がある育苗箱施用剤を使用する。
- ②の水田でごま葉枯病の発生履歴がある場合は、出穂直前と穂揃期にブラシフロアブルまたはノンプラスフロアブルを散布する。②の水田で発生履歴がない場合でも、幼穂形成期～穂ばらみ期に発病が見られたら、出穂直前と穂揃期に防除する。

マンガン質肥料A	＜溶性マンガン施用量(kg/10a)＞	5～15
	＜溶性マンガン10%現物施用量(kg/10a)＞	50～150
マンガン質肥料B	＜溶性マンガン施用量(kg/10a)＞	13～19
	＜溶性マンガン30%現物施用量(kg/10a)＞	43～63



1) 薬剤処理の有無によるごま葉枯病の発生状況(令和6年)
 2) 穂枯れの発病度：穂枯れの発病程度を表す指標
 3) 薬剤防除：7/21(出穂直前)、7/31(穂揃期)
 4) ごま葉枯病を接種した条件での試験